

# 場面緘黙の年長女兒へのチェックリストを用いた介入

○竹中薫 (ABA ソリューション)      奥田健次 (行動コーチングアカデミー)      小口詔子 (ABA ソリューション)  
 KEY WORDS: 場面緘黙 チェックリスト エクスポージャー

**【目的】** 本研究では場面緘黙と診断された年長女兒に対し、緊張状態のチェックリスト (加藤, 1985) を用いて発話記録表に記入を行い、母親が日常生活場面において介入を行うことによる効果を検討する。

**【方法】** **【対象児】** 介入開始時 5 歳 7 か月の女兒で、保育園の年長であった。**【生育歴】** 動作、言語の発達とも通常範囲内であった。2 歳より保育園に通園しており、毎朝「行きたくない」と泣くことが 4 歳 (年中) の後半まで続いた。遊びには誘われれば入るが喋ることはなかった。母は、外出先で保育園の子と会うと固まることなどがあり疑念を感じていた。父が来年小学校に入学することを心配し、児童精神科で年長の 7 月に「場面緘黙」の診断を受けた。**【介入前の様子】** 家では活発に動き喋っていたが、園では動きも少なく、端にいることも多く、喋ることがなかった。年中の後半に母が挨拶ぐらいするようと叱り、以降、先生に小さな声で挨拶を返していた。特定の子 (A 男) には、聞かれたことには小さな声で答えており、遊ぶときは笑顔が見られていた。母は喋ることができた時にお菓子をあげるときもあった。特定の子以外が遊んでいるその場にいることはあったが、他児と会話はできず、笑顔になるが声は出なかった。外出先では、母に対しては大きな声で喋り騒ぐこともあったが、友達や先生がいると固まってしまい、母に「もう帰ろう」と小さい声で言い避けようとしていた。公園も同様であったが兄がいると遊び続けることができた。

**【介入】** 月 1 回家庭に訪問し教育相談を実施した。様々な場面について、安心できる場所・人・活動、緘黙になる場所・人・活動について発話記録表の記入を母が行った。発話状態の評価は加藤 (1985) の緊張程度のチェックリストを利用した。**< I 期: 保育園年長夏〜卒園まで #1~#7 >** 喋ることを強要することや、喋られたかどうかのフィードバックは行わないようにした。園の友達を自宅に引き遊ぶことを計画したが、帰りの時間が友達と合わず家で遊ぶことはできなかったため、園に兄とともに少し早く迎えに行き遊んでくるようにした。その際、遊びに協力してくれるよう他児の母にも働きかけるようにした。また園と話し合いを行い、場面緘黙について伝え協力を求め、小学校入学に向けて引き継ぎのお願いをした。翌月より園でも発話について記録を開始した。小学校入学前に、小学校の先生と話し合いを行い、場面緘黙について伝え支援の協力を求めた。**< II 期: 小学校 #8~#15 >** クラス編成や席順について配慮がなされた。本児の席は担任の前で園の友人 (B 子) の側であった。クラスでは B 子との関係を中心に発話することができていたが、学童では緘黙状態が見られていた。学童のお迎えに兄を連れて、校庭や学童の部屋で母 (父) と兄も含めて毎日 5 分は遊ぶようにした (#10~)。#11 までに 24 回実施した。他の場面でも緘黙状態が見られる場面には、母や兄を入れて遊ぶようにした。家で友達と遊ぶ場面を設定することは続けた。その後、発話が見られた場面については、母や兄がいない状況も作った。

**【結果】** **< I 期: Table 1 >** 年長の 1 月より、園で給食グループと誕生月が一緒だった B 子と遊ぶようになり、その後、他児とも会話ができるようになった。

**< II 期 >** クラスでは、B 子を中心とした友人関係を築き、緘黙は見られていなかった。B 子と離れると緊張した様子を見せることもあった。学童の、運動場では A 男と遊ぶこともあったが室内で緘黙が見られていた (Fig.1)。先生と 2 人で過ごすことが多く喋ることはできなかつた。母や兄と校庭で遊ぶ場面を設けた後、室内でも活動や喋ることができるようになった。習い事の合気道でも、他児と 2 人の場面に母と兄も入れることで他児に喋りかけることができるようになった。母や兄がいない状況でも発話が見られるようになった。外出先で他児に声をかけられ手を振り返し返答できるようになった。公園で他児と一緒に遊ぶことや、友達の家で一人で遊びに行くこともできるようになった。

Table 1 I 期結果

場所	人	平均		高頻度
		発話	緊張	
保育園	担任	発話	1	0
		回避行動	0	0
		発話と声量	2	0
	他の先生	回避行動	2	1
		発話と声量	2	2
		身体緊張	0	1
	夕方の先生	発話	2	1
		回避行動	0	0
		発話と声量	3	2
	友だち	回避行動	2	1
		発話	1	0
		発話と声量	3	2
A君	回避行動	2	1	
	発話	1	0	
	発話と声量	2	0	
		身体緊張	1	0

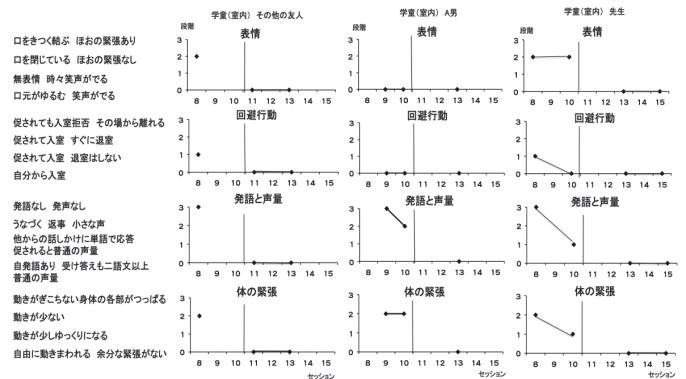


Fig. 1 II 期 学童 (室内) の結果

**【考察】** 緘黙状態になる場面や状況に、会話が出来る場面の要素を持ち込むことが、緘黙状態の改善に有効であった。このことは、不安を引き起こす刺激に対して、それ以上に安心して会話できる刺激を提示することによる拮抗条件づけが成立したことによると考えられる。

また、日常生活の中で母親が介入を行い、月 1 回の教育相談にてフィードバックをするという相談形式も有効であったと思われる。緘黙状態になる場面に、母親が日々直接働きかけることはエクスポージャーの作用もあったと思われる。したがって、チェックリストを用いて緘黙場面をアセスメントしていく行為そのものが、場面緘黙の改善に有効なアプローチであるということもできる。発話記録表を用いることで、母親が現在の状況を客観的に把握し、どこに介入が必要なのか、どの刺激に不安を感じているかを理解しやすく、介入による変化も実感しやすいものであろう。これにより、母親の積極的な取り組みが促進されたと考えられる。

**【文献】** 加藤哲文・小林重雄・山中貴子 (1985) 軽度精神遅滞児の選択的緘黙反応への行動療法的アプローチ. 特殊教育研究, 23(2), 12-20.

(TAKENAKA Kaori, OKUDA Kenji, KOGUCHI Shoko)